

クロイツフェルト・ヤコブ病診断以前の脳外科手術事例について

1 現状

脳神経外科手術を行った患者が、後に CJD と診断された場合、脳神経外科手術の器具を介した医原性 CJD 感染のリスクが指摘されている。

我が国において、既に平成 16 年から 3 例報告例があり、同じ手術器具を使用した他の患者（リスク保有者）に対して献血などを行わないように告知等を行ったところである。また、通知を発出し、都道府県、関係団体等に対し適切な消毒方法の周知・徹底を図ってきたところである。

今回、このような事例が更に 2 例発生したため、クロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランス委員会の意見等をふまえ、当該医療機関に対してリスク保有者に対して告知等を行うよう指導を行った。

なお、英国 CJD インシデントパネルにおいては、通常の消毒法が取られている場合は、手術器具に付着したプリオンの病原性が約 10 回の通常の消毒にて除去されることから、CJD 患者の手術後同一器具使用の最初の 10 名をリスク保有者として記録し、必要に応じて告知等の対象としており、これを参考として対応を行った。

2 医療機関への対応

1) 4 例目

CJD と後に診断された患者への手術後、6 名の者に対して手術を実施した CJD 患者と同一器具により手術が実施された。また、手術の後に手術器具により職員が右肘部を受傷した。よって 7 名をリスク保有者と考え、平成 18 年 11 月 20 日に病院に対して告知を実施するよう指導した。

2) 5 例目

CJD と後に診断された患者への手術後、同一器具を用いた手術は行われておらず、その後同一器具に対して異常プリオンに対応する滅菌が行われたため、告知の対象はなしとした。

(※) 各事例（1 例目から 3 例目までは既に報告済み。参考資料 1）

	同一手術器具使用者数	告知者数
1 例目	11 名	11 名
2 例目	23 名	10 名
3 例目	12 名（8 名＋4 名）	12 名
4 例目	7 名（6 名＋1 名）	7 名
5 例目	なし	なし

(4例目)

- 1 平成18年10月サーベイランス委員会に対して、脳神経外科手術を受けた後に遺伝子検査により家族性クロイツフェルト・ヤコブ病(以下、fCJD)と診断された症例の報告があった。同症例は、平成18年10月に脳神経外科手術を受け、その後同月にfCJD の診断を受けた。手術を実施した病院は、当該患者の診断後、CJDサーベイランス委員会の助言に基づき直ちに手術を停止し、異常プリオンに対応した器具の滅菌法に変更した後、手術を再開した。
- 2 その後の調査により、同病院では当該患者に対する手術実施後、手術のための通常の感染防止対策は行われていたものの、異常プリオンに対する特別な滅菌法がなされないまま、同一手術器具を用いて、6名の患者に対し脳神経外科手術を実施したことが判明した。また、同6例中3例目の手術の際に、汚染した器具により職員1名が右肘部を受傷したことも判明した。
- 3 平成18年11月20日に、同病院に対して同一手術器具にて脳神経外科手術を受けた6名の患者および1名の職員への説明を実施すること、また、更に今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップを実施することについて指導を行った。
なお、現在6人の患者および1人の職員への説明は実施済みである。

(5例目)

- 1 平成18年11月サーベイランス委員会に対して、脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(以下、sCJD)と診断をされた症例の報告があった。同症例は、平成18年9月に脳神経外科手術を受け、同月sCJDの診断を受けた。手術を実施した病院は、当該患者の診断後、直ちに異常プリオンに対応した器具の滅菌法に変更した後、手術を再開した。
- 2 その後の調査の結果、同病院では当該患者に対する手術実施後、異常プリオンに対応する滅菌がなされるまでの間、脳神経外科手術を受けた患者はいないことが判明した。

CJD 感染防止の件について(2例目)

- 1 平成17年2月サーベイランス委員会に、脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(以下、sCJD)を発症した症例の報告があった。症例は、平成16年8月脳神経外科手術を受けた後、同病院にてフォローアップ中の平成16年12月14日に sCJD の診断を受けた。同病院は、サーベイランス委員会ブロック委員の医師の指導を受けて、平成16年12月17日に手術を停止し異常プリオンに対応した器具の滅菌方法に変更し、手術を再開した。なお、平成17年9月20日のサーベイランス委員会において、本事例につき二次感染の可能性が指摘され引き続き調査を行うこととなった。
- 2 その後の調査により、同病院では当該患者に対する手術実施後、手術のための通常の感染防止対策は行われていたものの、異常プリオンに対する特別な滅菌法がなされないまま、同一器具セットを使用した23名の患者を同定した。通常の手術器具消毒約10回にて異常プリオンの感染性が否定されるとの英国の報告をもって、このうち最初の10名をリスク保有者と考えて告知を行うこととした。
- 3 その間、手術器具を介した異常プリオンの感染防止対策を図るよう、サーベイランス委員会から関係学会へアナウンスが行われ、関係学会はそれを受けて連絡を行うなどの対応を適宜行っている。
- 4 平成17年12月24日に、同病院に対して同一器具セットにて脳神経外科手術を受けた最初の10人の患者へ説明を実施すること、また、更に今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップについても指導した。同一器具セットを用いたがリスク保有者と考えられなかった残りの13名についても、当該患者のカルテの10年間の保存を指導した。
なお、現在10人の患者への説明は実施済みである。

CJD 感染防止の件について(3例目)

- 1 平成17年11月サーベイランス委員会に、脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(以下、sCJD)を発症した症例の報告があった。症例は、平成17年6月及び7月に脳神経外科手術を同一病院にて受け、その後平成17年10月に別の医療機関にてsCJDの診断を受けた(その後、遺伝子検査により家族性CJDと診断された)。手術を施行した病院は、当該患者の診断を受け、即日手術を停止し、以後手術を実施していない。
- 2 その後の調査により、同病院では当該患者に対する手術実施後、手術のための通常の感染防止対策は行われていたものの、異常プリオンに対する特別な滅菌法がなされないまま、同一器具セットを使用して、当該患者の1回目の手術後には4名、2回目の手術後には8名の患者が脳神経外科手術を受けたことがわかった。
- 3 平成18年1月6日に、同病院に対して同一器具セットにて脳神経外科手術を受けた12人の患者への説明を実施すること、また、更に今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップについて指導を行った。
なお、現在12人の患者への説明は実施済みである。